楽しさの構造解析を用いた主体的な学び
－　体育科における二極化の解消に向けて　－

学籍番号　229336
氏　　名　徳永 海偉
主指導教員　井上 功一
副指導教員　神藤 隆志

１．はじめに

1.1 研究背景と目的

近年, スポーツ界での日本人選手の活躍が際立っている．笹川スポーツ財団（2021）の調査によると2021年に開催された東京オリンピック夏季大会に参加した国・地域の中でも5番目にメダル獲得数が多く過去最多のメダルを獲得した．スポーツ庁は新たな施策として2022年公示した第3期スポーツ基本計画の中で「持続可能な国際競技力の向上」を示し,取り組みを続けている．一方で児童の運動能力の低下や運動習慣の悪化が大きな社会問題となっている．体育授業では技能差を意識する児童も見られる．スポーツ・運動の楽しさを様々な側面から捉えることが,文部科学省(2017)が謳う「生涯にわたって健康を保持増進し,豊かなスポーツライフを実現すること」につながるのではないか．そのためにも,技能の習得と向上を学習軸として,体育の楽しさを感じる観点がどのように変容するのかを調査する必要性がある．そこで楽しさの構造解析を行い,運動習慣の二極化解消に向けた積極的な関り方の視点を増やすことを目的としている．

1.2 楽しさの尺度

文部科学省（2015）の平成27年度全国体力・運動能力, 運動習慣等調査報告書から, 実践において「技能向上の為の指導」が有効であると考えられる．そこで初めに児童が体育授業においてどのような観点で楽しさを感じられているのかを調査した．楽しさの構造解析には, 徳永ら（1980）, 伊藤（1988）, 藤田（2009）, 梶ら（2020）の研究を参考に47の質問項目を独自に設定し, 単元前後での意識調査を実施した．

２．研究方法

研究を行うにあたり基準となる因子構造を作成するために,全 47 項目について, 3 件法で回答を求めた．楽しさの構造解析をする上で,ピアソンの相関係数を求めた．求められた相関行列から主因子法による分析を行った．因子は第 4 学年,第 6 学年ともに 47 因子までの固有値が 1,000 以上で,累積寄与率が 60%以上または最大値となった因子を抽出することとした．それらの因子を直接バリマックス法により軸の直交回転を行った．結果,全 12 因子に分類された．両学年ともできるようになるという運動の成功経験を重要視するためにも技能の習得と向上を目指し,単元を通した楽しさを感じる観点の変容を学年,運動能力ごとに調査した．なお,各学年で体力・運動能力調査の結果を用いて運動能力ごとに上位群,中位群,下位群の 3 つのグループ分けを行った．

３．授業実践

第 4 学年, 第 6 学年ともに技能習得と向上を目指した指導を行った. 第 4 学年では走・跳の運動領域である短距離走のタッチコーン,第 6 学年ではボール運動領域のティーボールを簡素化したゲームを行った. なお第 6 学年での前半の授業実践は, より簡素化したゲームを行うことでボールやバットなどの用具を取り扱う事に慣れることとした. 後半の授業実践ではゲームに勝つための話し合い活動を取り入れた. 話し合い活動では教員が戦略を指導することは行わなかった.

４．結果及び考察

4.1 第4学年

全体の結果として,12 因子中 6 因子が平均値の上昇と分散値の縮小が見られた. このことから複数の観点で楽しさを感じられるようになったことが明らかとなった. また楽しさの要因に勝敗はあまり関係していないことが明らかとなった. さらに,技能の習得と向上の為の関わりを増やした結果,運動能力別では上位群が他者協働や勝敗の因子が有意に向上したことや,下位群は他群より多くの因子でプラスの変化率を示していたことから,技能指導を通して楽しさの因子への直接的な働きかけがなくとも,楽しさをより多くの観点から捉えられるようになることが推察できる.

4.2 第6学年

全体の結果として,9 因子で平均値の上昇と分散値の縮小が見られた. 勝敗に関する因子では楽しさを感じられるようにはなっていたが分散値は広がりを見せていたことから,児童間での差が見られるようになったことが分かった. また運動能力別に比較すると,中位群と下位群ではプラスの変化を多くの因子で示していることから,技能の習得と向上の為の働きかけを増やすことで,「できるようになる」という成功経験を積みながら楽しさを多くの観点から捉えられるようになる可能性が推察できる. また,第 4 学年に比べて第 6 学年では全体的に低い数値となったことから,小学校の早期段階から「する」ことを通した技能の習得と向上を目指すことが重要であると考えられる.

５．まとめ

今回の研究では, 技能の習得と向上を学習のテーマに設定し, 楽しさを感じる観点の変容を調査した. この研究から, 学年と運動能力による楽しさを感じる観点の変容見出すことができた. 運動能力の上位群では元々楽しさを多く感じられてこともあり, 有意な差は見られにくかったものの増加傾向にあり, 学年を問わず運動能力の中位群と下位群の単元前後で楽しさを感じられる要因が大きく増加していた. よって運動技能の習得と向上を図ることが, 他因子にも間接的に働きかけて運動の楽しさを様々な側面から捉えることに繋がり, 豊かなスポーツライフへの接続を担い, 二極化の解消へつながるのではないか.